歩み編さんだより

令和７年３月
Vol.26
（最終号）

『和泊町の歩み』編さん事務局発行

第4回「郷土学習講話」を開催

新町誌「和泊町の歩み」執筆陣が講師を務める「郷土学習講話」第４弾が令和７年２月 21 日（金）にありました。「歩み」考古学編の第４～６章を執筆した新里亮人氏（熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授）を招き、考古学から見る奄美・沖縄の歴史を学びました。

新里氏は縄文・貝塚時代からグスク時代、琉球国時代にわたり奄美・沖縄の島々間や他地域との交易が行われていたのかなど詳しく解説。また、琉球の古墓と共通する特徴を持つ「世之主の墓」など沖永良部島の古墓群を「卓抜的」とし、奄美群島でなぜ沖永良部島だけにこうした古墓が残っているのかという謎に迫る新説にも触れました。

沖永良部島内の遺跡から出土した遺物に実際に触れながら、新里氏が生解説！ぜいたくな授業です♪

城ケ丘中での講話には、1･2年の生徒と教職員ら30人ほどが参加しました。

新里氏は、考古学の成果から分かる奄美･沖縄の歴史を、日本史の流れと対比させながら解説。特に、南島産の貝を使った貝交易や徳之島のカムィヤキ、博多や沖縄を経由した中国産陶磁器など、琉球の島々が海を越えて行った交流･交易の歴史について詳しく話しました。

また、伊仙町教育委員会学芸員として働いた経歴にも触れながら、考古学や博物館に関わる仕事についても解説。「教科書に載っていない足元の歴史を見つめて」と呼びかけました。

中央公民館であった一般町民対象の講話には、町内外の40人が参加しました。
新里氏は、12 世紀前後（グスク時代）の奄美群島では、大型碇石が多く出土する奄美大島は物資運搬、製鉄遺構が確認された喜界島は鉄生産供給、徳之島カムィヤキの窯業生産と島別分業化され、その後に琉球国が成立して沖縄本島に各産業が集約されたと説明しました。
また近年博多の遺跡から薩摩硫黄島産の硫黄の出土が確認され、対中輸出品として硫黄が福岡に集積された可能性が指摘されていると説明。同じく硫黄を産出する硫黄鳥島はエラブにも近く、また中国側の記録をもとにエラブが硫黄の供給拠点だった可能性を探る新説もあると紹介しました。エラブで卓抜した古墓が集中する謎を解くカギとして、硫黄交易に注目していると語りました。

エラブ古墓の謎に迫る!!

上写真）エラブに残る古墓の代表格である世之主の墓（「和泊町の歴史」より）
左写真）硫黄鳥島（新里氏提供）

生徒たちの感想文より

学芸員のこと、日本本島と琉球列島の違いを初めて知りました。
歴史の授業では日本本島のことしか学ばなかったが、今回の講話を聴いて琉球列島の昔の生活の違いなどが分かりました。（２年男子）

一番面白いと思ったことは、出土品によって当時の様子や環境などが分かるということです。
実際に（土器や陶磁器に）触ってみて、ツルツルしていたり、なみなみの模様などがあって、昔にもこんな技術があったんだなと、興味深かったです。
（１年女子）

沖永良部にある世之主の墓などのつくりが他のところにないと聞いて、とても驚きました。海の中に遺跡があることにも驚きました。実際に出土したものを触ってみて面白かったです。
（１年女子）

考古学は出土品によって昔の生活が分かり、自分の発見によって謎を解き明かすことができるのが魅力だと思います。この沖永良部にもあると思ったら、とてもおもしろいと思いました。
（２年男子）

「歩み編さんだより」は今回が最終号です。『和泊町の歩み』に関連する事業は今後、和泊町教育委員会が引き継ぎます。これまで４年間にわたり編さん事業にご協力をいただきましたことに、スタッフ一同、心より感謝申し上げます。これからも共に「ふるさと和泊」を学び続けましょう！